

〈論文〉

韓寒の雑誌に対する夢——『独唱団』から『one・一個』へ

王 宇 南

要約

『独唱団』と『ONE・一個』は、どちらも韓寒が編集長を務める文芸誌である。『独唱団』は「雑誌」であり、厳密に言うところ「ムック」であるが、『ONE・一個』はスマートフォン雑誌アプリケーション（スマートフォンに限らず、パソコンや他の携帯端末などでも読むことができる）であり、現代的な色彩を持っている。2015年7月に発表された『中国インターネット発展状況統計報告』によると、2015年6月まで、中国のインターネット利用者数は6億6千8百万人に達し、半年で新たに1894万人増加した。インターネットの普及率は48.8%で、2014年末に比べて0.9%増加した。そのうち、携帯電話でのインターネット利用者数は5億9千4百万人に達し、2014年12月に比べて3679万人増加したことが分かる。ⁱ このような状況のなか、読者の読書傾向が伝統的の定期刊行物から電子書籍に転向することが必然であると思われる。スマートフォン雑誌アプリ『ONE・一個』は、製品の設計にしても掲載作品の内容にしても、中国の若年世代の間で、大変良い評判を得ている。中国大陸の同様の製品の中で手本になり、韓寒のここ数年間の最も優秀な「作品」であると言えよう。『ONE・一個』が市場において広範な好評を博した状況の中、2010年無期限出版停止となっていた『独唱団』のことを振りかえて考えてみると、八〇後作家の生存空間と八〇後文学の発展様式が前世代の伝統的作家、そして既成の文壇と比べ、すでに大きく変化したことが分かる。本文は『独唱団』と比較しながら『ONE・一個』の誕生と発展過程、そして掲載される文学作品などを考察し、『ONE・一個』が八〇後作家、読者そして八〇後文学にどのような影響を与え、どのような意義を持つのかを考える。

1. 韓寒について

中国八〇後の代表作家韓寒は、1982年9月上海に生まれる。1999年に『萌芽』雑誌社が主催した第一回新概念作文コンクールで最優秀賞を獲得し、世間の注目を受け始めた。文才が優れる一方、彼は学期末試験で七科目も不合格となって学校から休学の勧告を受け、高校を中退することになった。上海の復旦大学から無試験で入学の聴講生となることを誘われたが、韓寒は断った。2000年に彼は小説『三重門』（日本語版題名『上海ビート』、平坂仁志訳、サンマーク出版、2002年）を出版し、200万部以上を売り上げて過去20年の中国で最大のベストセラーの一つになった。このように、韓寒が退学し作家デビューして反教育的な言論によってブームを引き起こし、一時「韓寒現象」と呼ばれ、当時のホットな話題となった。

作家デビューしてから、韓寒はエッセイや小説などの文集を出版し続けていた。痛烈な社会批判で知られる人気ブロガーとしても存在している。彼のブログのアクセス数は

2006年から現在まで6億以上に達している。また、韓寒は2003年からプロレーサー、ラリー選手として活動を開始し、2009年の中国ラリー選手権では、N組で年間チャンピオンの座を獲得した。2010年に『タイム』誌で「世界で最も影響力のある100人」に選ばれた。さらに2013年に映画「后会无期（中国語版）」の脚本兼監督を務め、2014年7月に映画が公開された。

また、雑誌創刊において、2009年から韓寒は自身が編集長を務める文芸雑誌『独唱団』の出版を試みた。『独唱団』第1号は2010年7月6日に正式に発売され、発売後22日目で売り上げは100万部を突破したⁱⁱが、第二号は当局の圧力で発売中止となった。その二年後、『独唱団』の編集部とほぼ同じメンバーで韓寒が編集長を務めるスマートフォン雑誌アプリ『ONE・一個』が開発された。『ONE・一個』は今年三周年を迎えるが、若者の中で大きな反響を呼んでいる。

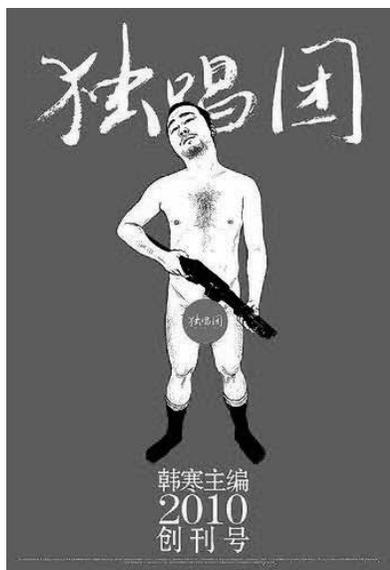
2. 『独唱団』の休刊

2010年7月6日、韓寒が編集長を務める『独唱団』の第1号は山西集団書海出版社によって出版され、華文天下文化公司によって発行された。華文天下文化公司の販売責任者の話によると、『独唱団』は出版後の1ヶ月で発行数は120万部も超えた。『独唱団』第2号は編集と100万部の印刷がすでに終わり、発送待ちの状態であったにも関わらず、2010年12月28日に韓寒はブログで「事實は僕の能力不足で、『独唱団』の第2号のみならず、今後の各号も出版できなくなった。ここで『独唱団』の編集部を解散することを宣言する」ⁱⁱⁱと述べた。

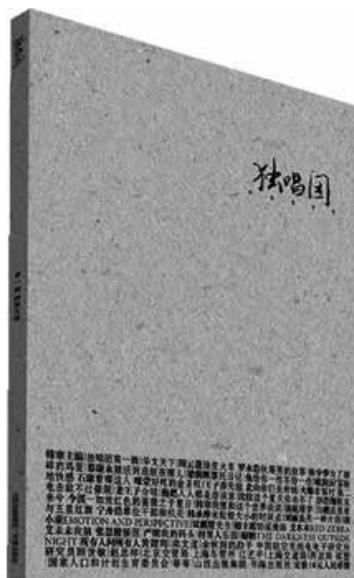
『独唱団』の発行停止の原因についてはいろいろと推測されているが、その中でも最も大きな問題を含むのは『独唱団』の出版形式である。『独唱団』実際は雑誌であるが、雑誌コード（中国統一刊号CNコード）がなく、代わりに書籍コード（国際標準書号ISBNコード）で発行しているため、その実際の出版形式は「ムック」になる。「中国『出版管理条例』、『期刊管理暫行規定』および『科学技術期刊管理辦法』などによれば、中国統一刊号CNコードの申請には、政治的責任を果たすことができ、新聞行政部門がそれを認めるなどの条件を満たす主管単位が必要となり、それらはいずれにしても政府部門の機構である。実際、現在の中国では個人の申請による定期刊行物の創刊はほとんど不可能であり、新しい刊号さえ取得できない状況にある」^{iv}。そこで、雑誌と図書の間にあるムックの出版形式は、中国大陸における雑誌コードの不足をある程度緩和している。『独唱団』を含め、多くの青春文芸誌はムックの独特な性質によって良い販売成績を達成したが、残念ながらムックの出版形式は現段階の中国の出版制度に違反しているため、法的なリスクを負っている。中国大陸は2008年5月1日に新しい『図書出版管理規定』を施行しているが、その第28条は「図書出版機構は中国標準書籍コードあるいは全国统一書籍コードで定期刊行物を発行することができない」と明確に指摘している^v。

一方、発行停止は当局からの圧力によるものとの噂もある。たとえば、創刊号表紙には「檔中央有槍」（党中央には鉄砲がある）というパフォーマンスの写真（図1）を載せる予

定であったが、これは2010年に貴州省で2人の農民が警察の発砲により射殺された事件を想起させるとの理由で審査が通らなかった。結果的に出版された創刊号の表紙は図2のようにシンプルなものに変わった。



(図1)



(図2『独唱团』第1号表紙)

『独唱团』は書籍コードで出版しているため、毎号の雑誌は必ず出版社を通して審査を受けなければいけない。そのうえ、「韓寒式」の文章は社会批判的な内容が多いため、『独唱团』の審査はほかのムックに比べてさらに厳格である。創刊号は出版までに10社前後の出版社を変えた経緯があり、第2号の難産につながる重要な原因のひとつである。

3. スマートフォン雑誌アプリ『ONE・一個』の誕生

『独唱团』が休刊して二年後の2012年10月、スマートフォン雑誌アプリ『ONE・一個』が誕生した。「『ONE・一個』は韓寒が編集長と発行者を担当し、『独唱团』編集部の主なメンバーが編集者を担当する文芸アプリケーションである。発表して24時間以内でApp Storeの無料ダウンロードランキングの第1位となった。」^{vi} 『ONE・一個』が非常に短い期間でこのようにたくさんのファンを集めたのは、読者たちが韓寒個人への期待、いわゆる「名人効果」のおかげでもあるし、すでに休刊した『独唱团』への読者たちの残念な思いと期待もあるのかもしれない。そのため、特に力を入れて宣伝しなくても、『ONE・一個』が誕生した時からその市場は大きく、ある程度安定していた。同じ韓寒が編集長を務める文芸誌であるが、すぐに休刊になった『独唱团』の運命と違って、『ONE・一個』は短期間で人気を集め、順調に発展することができた。

『独唱团』の創刊号はエッセイや小説など全部で34編の文章が収められていた。作者は

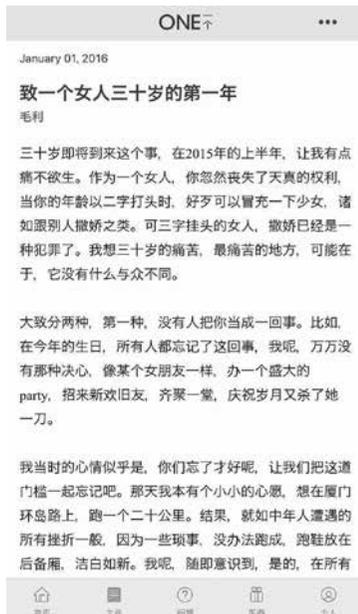
それぞれ大陸や香港、台湾、マカオの出身であり、なかには1952年生まれの日本文学翻訳家林少華もいれば、1962年生まれ台湾の有名なキャスターの蔡康永、1972年生まれのネット・オピニオンリーダーの羅永浩もいた。したがって、『独唱団』は作者の年齢や地域、そして風格を限定することがなく、むしろ意図的に幅広く中国語圏知識人に呼びかけ、深みのある雑誌を目指していた。紙媒体の定期刊行物と比較すると、中国大陆において電子書籍の審査制度はまだ厳密にできていない。現行の法律では、電子書籍に対して、その情報安全対策（例えばファイアウォール）のみ認証を行っているが、そのほかに明確な規定が少なく、内容に関して過度な色情や暴力、そして反共産党の内容以外に特に関与することはない。しかし、雑誌アプリケーションの『ONE・一個』は『独唱団』に比べると、その内容は意外にも単純なものになった。『ONE・一個』は主に以下の五つの内容に分かれる。

- 1) 一枚の画像。オリジナルの写真作品あるいは美術作品（図3）。
- 2) 一つの言葉。有名な文学作品の中の言葉もあれば、出典の分からない面白い話もある（図3）。

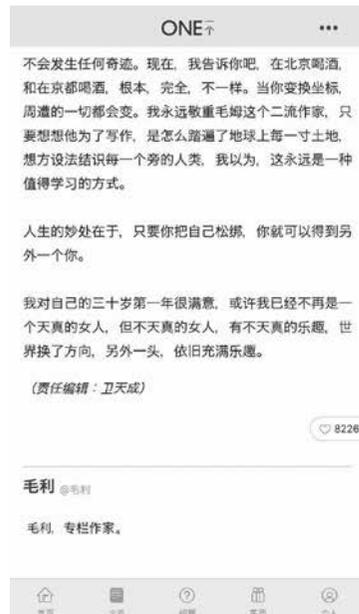


(图3 『ONE・一個』2016年1月3日)

3) 一篇の文章。主に青年文学者の短編小説。(図4、図5)



(图4 『ONE・一個』 2016年1月1日)



(图5 『ONE・一個』 2016年1月1日)

4) 一つの事物。世界各地的面白い物事、製品の紹介(図6)。広告になって商品を販売することもある(図7)。



(图6 『ONE・一個』 2016年1月3日)



(图7 『ONE・一個』 2016年1月2日)

5) 一つの問題とその回答。誰でも質問することができる。関係者が答える (図8)。



(图8 App store『ONE·一個』の紹介)

『ONE·一個』アプリの内容は毎日更新されて、アプリのなかで十日前までの内容を読むことができる。アプリの操作方法は簡単で分かりやすい。文章を微博や微信^{vi}にシェアしたり、友人に転送したりすることができるが、読者のコメント機能を設けていない。

『ONE·一個』に掲載される文章の多くは八〇後、九〇後作家、文学愛好家の作品であり、青春や恋愛を題材とした小説がほとんどである。

※ 2015年11月22日から十日間の作品の題名は下記通りになる。

2015 / 11 / 22 《不忠》 作者 李诞 (脱口秀节目写手, 一米八三大诗人)

2015 / 11 / 23 《一生要爱多少人》 作者 红拂夜奔不复还 (编剧)

2015 / 11 / 24 《奔跑吧, 兄弟!》 作者 午歌 (80后机械高级工程师, 青年作者, 编剧)

2015 / 11 / 25 《最后的进化》 作者 欧阳乾 (作家, 拳手, 屌丝, 不和平主义者)

2015 / 11 / 26 《时间杀死的恋人》 作者 贾彬彬 (青年作者)

2015 / 11 / 27 《盖世英雄》 作者 路明 (大学教师, 「一个」app 常驻作者, 首部作品集《名字和名字刻在一起》正在热卖中)

2015 / 11 / 28 《打字狗》 作者 哥舒意 (作家)

2015 / 11 / 29 《多余的人》 作者 魏运 (作家)

2015 / 11 / 30 《我有很多坏毛病, 但有爱你这个好习惯》 作者 顾奈 (青年作者)

2015 / 12 / 01 《看云时很近》 作者 韩今谅 (个体户)

これらの作品は、作風がユーモアで鋭く、若い世代の世界観と文学スタイルを十分に表現し、鮮明な時代感が感じられるが、作品の内容がやや浅薄で、個人の気持ちを記述するものが多く、民族意識や国家意識、そして人文的配慮など文学作品のあるべき現実的意義に欠けている。掲載作品の文学性にしても、思想的深さにしても、『ONE・一個』はまだまだ伝統的文学定期行物と一定の距離があるのではないと思われる。

『ONE・一個』は巻末に書かれている言葉のように：「ホットな話題を追わない。時事政治に関わらない。騒ぎ立てない。紛争を誘発しない。」¹¹¹ 痛烈な社会批判と期待される『独唱団』と正反対に、『ONE・一個』は敏感な話題を避けている。

4. 広告による収益

現在のスマートフォン雑誌アプリは、収益のための手段が主に二つある：雑誌の内容を読む際に課金するケースと雑誌自体が無料で、広告による収益。現在、有料雑誌アプリは全体の中で少数であり、アプリストアにおいてダウンロード数も比較的少なく、そのほとんどが有名な伝統定期行物発行社に属するものである。『ONE・一個』の場合は、アプリのダウンロードも雑誌の内容を読むことも、完全に無料である。そのかわりに、多くの読者および読者の雑誌に対する認知度を利用して、広告の価値を高めている。大多数のスマートフォンアプリはダウンロード率とアプリに費やす時間、または文章の閲覧回数を追跡し、記録する機能がある。このような機能は雑誌社や広告主に確実なデータを提供することができ、紙媒体の広告よりもその効果が一目瞭然である。現在『ONE・一個』の収益は主に広告に頼り、ページの切り替えの際や、ページの底部などあらゆるところに広告の挿入が見られる（図9）。

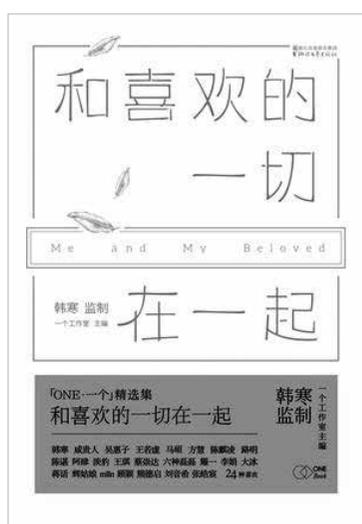


(图9 『ONE・一個』2015年12月)

5. 『ONE・一個』シリーズの書籍の出版

『ONE・一個』は定期的に『ONE・一個』シリーズの書籍を出版している。『ONE・一個』は今年三周年を迎えるが、この三年の間、『ONE・一個』シリーズは二十冊以上の本を出版している。『ONE・一個』シリーズの書籍は、アプリの中で100万回以上の閲読量があり、好評を博した文章を集めた文集もあれば、『ONE・一個』で作品を発表することによって急速に人気を集めた作家の個人の文集もある。作家個人の文集であっても、例外なく「『ONE・一個』人気作家」や「『ONE・一個』知名作家」などのラベルを貼っている（図10、図11）。

韓寒個人または『ONE・一個』の影響力でこれらの書籍の販売は盛況である。『ONE・一個』シリーズ書籍の出版と発行は八〇後、九〇後青年の作家デビューの近道になり、読者や既成の文壇に認められたい彼らにとっては、非常に重要な意義を持っている。



（図10 『ONE・一個』文集『和喜欢的一切在一起』の表紙）



（図11 作家方慧の個人文集の宣伝ポスター）

6. おわりに

韓寒の『独唱团』と『ONE・一個』だけではなく、近年、多くの青年作家が創刊する青春文学の文芸誌が流行している。2006年から、郭敬明は長江文艺出版社と提携し、『最小説』を出版し始めた。『最小説』は本の形態から文章の作風に至るまで、個性的で新味を見せ、毎期の発行数は50万部数にもものぼる。また、笛安が編集長を務める『文艺風賞』や、落落が編集長を務める『文艺風象』、張悦然が編集長を務める『鲤』など、多くの青春文芸誌が次から次へと書籍市場に現れた。中国現代文学の発展を振りかえってみると、青年作家が文芸誌を営むことは決して新しいことではない。中国の作家は文芸誌と密接な関連を持っている。文芸誌はある程度中国現代文学の創作傾向と全体的なレベルを反映している。韓寒や郭敬明が代表とする八〇後作家は、16年前からすでに新概念作文コンクール

によって文壇に現れているにもかかわらず、未だに既成の文壇と評論家に十分に認められていないため、作家の思想と文学スタイルを自由に表すことのできる独自の媒体は、八〇後作家にとって前世代の作家よりもさらに重要な意味を持っている。

八〇後作家の笛安が雑誌『文芸風賞』の創刊号で次のような発言をしている：「今日の若者は本当の文学が書けないと言う人がいるが、私たちは信じない。今の中国都市に深い感情的表現と精神的訴えがないと言う人がいるが、私たちは信じない。また、この功利的で焦燥感に駆られる実務的な世代である私たちが柔らかくて抒情的で、たとえ犠牲になっても節を曲げては生きたくないという文学の魂魄を引き継ぐことが不可能だと言う人がいるが、私たちはやはり信じない。私たちの力で何かをやり遂げることができると言い張ることはできないが、私たちは全力を尽くして一つの良い場所を開墾しようと渴望している。この場所は、私たちと同年代の若者を歓迎する。ここに入り、彼らのすべての喜びや悲しみ、そして望みを栽培しよう。この場所は、私たちより年上の人を歓迎する。ここに入り、彼らのすべての遺憾と困惑を栽培しよう。この場所は、私たちより更に若い少年を歓迎する。ここに入り、彼らの夢と軽はずみを栽培しよう。この場所は、私たちと異なる世界、異なる文化に生きている人々を歓迎する。ここに入り、お互いに言語が通じなくても理解されるすべての想像を栽培しよう。」^{ix} 『ONE・一個』は正にこのような「良い場所」ではないかと筆者は思う。『ONE・一個』は単なるスマートフォン雑誌アプリ、あるいは「文芸誌」ではなく、大きな影響力を持つ青春文学のブランドになり、次世代の文学者を育てる舞台になっている。既成文壇に認めてもらうよりも、自らより個性的な中国現代文学の未来を作り出そうとしていることは韓寒が代表とする八〇後作家の雑誌に対する夢ではないかと思われる。

注

- i 『中国互联网络发展状况统计报告』中国互联网络信息中心 2015年7月
- ii 『『独唱团』发行量过百万册』出版商务周报 2010年8月2日
- iii 韓寒のブログ(2010年6月10日)。中国語原文:「事实是由于我能力有限,『独唱团』的第二期乃至未来各期在均无法出版,所以特此宣布独唱团之团队解散。」
- iv 『「八〇後」と現代中国出版市場の変容——韓寒を中心に』楊冠穹 東京大学中国語中国文学研究室紀要 第17号
- v 『中国大陸における青春文芸誌に関する一考察』王宇南 2013年
- vi 『ONE・一個』の巻末に書かれている言葉。中国語原文:「『ONE・一個』是由·韩寒主编和监制,原独唱团主创成员共同制作的文艺应用软件。发布不到24个小时就登上App Store免费排行总榜第一名。」
- vii 現在中国で最も普及しているSNS
- viii 中国語原文:「不追热点,不关时政,不要喧哗,不惹纷争。」
- ix 中国語原文:「有人说,今天的年轻人写不出真正的文学,我们不信;有人说,当下中国城市里没有深刻的情感表达和精神诉求,我们不信;有人说,我们这功利、急躁、务实的一代人不可能延续文学那柔软的、抒情、宁为玉碎不为瓦全的魂魄,我们还是不信。我们虽然不敢妄言我们的力量能做到什么,但我们渴望着,能够竭尽全力,开垦出来一块儿好地方。在这个好地方,欢迎所有和我们生长在同一时代的年轻人,进来种植下所有的悲喜和奢望;欢迎所有比我们年长的人,进来栽种下他们所有的遗憾和迷茫;欢迎所有比我们更年轻的少年人,进来栽种下他们的梦想和轻狂;欢迎所有和我们生活在不同世界、不同文化的人,进来栽种下他们所有的、不需要互通语言就能被大家所理解的对象。」

参考文献

- ・『移動電子雑誌『ONE・一個』の運営模式探析』徐霖杰 龚偉麗 新聞研究導刊 第5卷第6期 2014年11月
- ・『中国大陸における青春文芸誌に関する一考察』王宇南 西南学院大学大学院 国際文化研究論集 第7号 2013年
- ・『「八〇後」と現代中国出版市場の変容——韓寒を中心に』楊冠穹 東京大学中国語中国文学研究室紀要 第17号